

< タイトル >

飼料イネを活用した繁殖和牛の周年放牧による合理的な農地利用法を開発

< 当該研究成果のポイント >

中央農業総合研究センターは、飼料イネを用いて水田で繁殖和牛を周年放牧する方式を、茨城県常総市の生産者とともに開発した。

この方式は、電気牧柵を使って牛の行動を制御しながら、春から夏は牧草で放牧、秋は飼料イネを栽培した状態のまま水田で給与（立毛放牧）、さらに冬期間には、収穫後に発酵粗飼料とした飼料イネを放牧地で与えるものであり、水田を積極的に利用した周年放牧である。

常総市で行ったモデルケースでは、飼料イネを収穫・利用するコストを約1/5に削減、畜産農家は、家畜の飼育頭数を増やししながら労働時間を減らすとともに飼料の自給率を向上、水田作の農家は、転作実施面積の拡大と6ha以上の遊休農地の解消を実現している。

本研究は、農林水産省委託プロジェクト『粗飼料多給による日本型家畜飼養技術の開発』で得られた成果である。

< 期待される効果・今後の展開など >

この方式は、飼料や生産資材の価格高騰が大きな問題となる中で、家畜生産および農地保全コスト低減を図る有効な技術として、普及が期待される。

今後は、飼料イネの立毛放牧利用を12月下旬まで拡大するための品種、栽培方法等を開発する。また、冬期にホールクロップサイレージを給与し、有機物が蓄積された圃場において、低投入型の大豆栽培など新たな輪作モデルを開発する。

< 研究所名 >

（独）農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター

< 担当者名 >

中央農業総合研究センター関東飼料イネ研究チーム 上席研究員
千田 雅之

< 連絡先 >

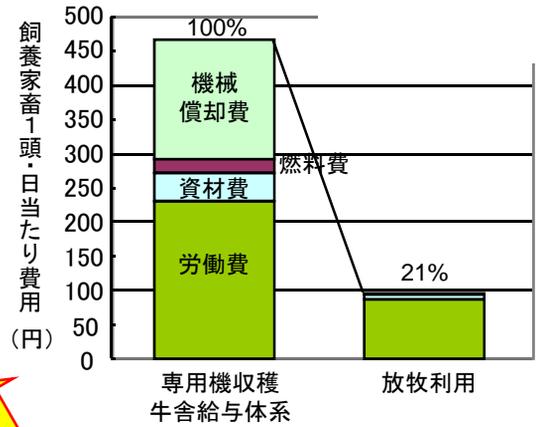
広報担当者 中央農業総合研究センター情報広報課長 上杉かおる
TEL 029-838-8979

立毛飼料イネの放牧利用を取り入れた 繁殖和牛の周年放牧方式



秋 飼料イネ立毛放牧(5a/頭)

機械による収穫・調製、運搬・給餌コストを約5分の1に削減。



冬 イネWCSの放牧利用(15a/頭)



春～夏 牧草放牧(30a/頭)

周年放牧による繁殖牛経営の変化

	耕畜連携前	イネWCS導入	周年放牧導入
労働力	2人	3人	3人
繁殖牛頭数	25頭	51頭	86頭
飼料生産・放牧面積	3ha	17.3ha	29.5ha
(イネWCS)		14.3ha	13ha
(放牧)		3ha	13.5ha
(採草)	3ha	3ha	3ha
稲わら収集	32ha	32ha	32ha
繁殖牛1頭あたり労働時間	-	78.4時間	41.6時間
飼料自給率 (TDNベース)	63.1%	63.1%	80.7%